

市内遺跡発掘調査報告書

(令和5年度)

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

2024. 3

長野県諏訪市教育委員会

例 言

1. 本書は長野県諏訪市に所在する遺跡についての令和5年度発掘調査報告書である。
2. 調査主体者は諏訪市教育委員会であり、各作業及び本書編集は諏訪市教育委員会事務局が担当した。
3. 現地調査期間は遺跡ごとに記載した。整理作業は令和5年11月から令和6年3月まで、諏訪市埋蔵文化財整理室で行った。
4. 発掘作業と整理作業の分担は下記の通りである。
発掘・遺構等実測…日野正祥・阪口賢・中島透・古畑しずゑ
遺物水洗・注記・接合・実測・トレース・写真撮影・本書執筆作成…日野正祥・中島透・古畑しずゑ・三上徹也・三好祐司
5. 各遺跡の調査記録は諏訪市教育委員会で保管している。略称・出土遺物の注記は下記の通りである。
池のくるみA遺跡…I K E A 1 花木久保遺跡…H A N K 2 諏訪神社上社遺跡…S J K 12
6. 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々をはじめ多くの方々にご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げます。
伊東謙二・笠原秀章・児玉利一・高見俊樹・公益財団法人文化財建造物保存技術協会（敬称略）

凡 例

1. 本文中における水系レベルは可能な限り絶対標高を使用した。
2. 本文中第1図は国土地理院 平成15年12月1日発行1/50,000『諏訪』と、平成11年1月1日発行1/50,000『高遠』を使用し、加筆・一部削除した。第9図は（公財）文化財建造物保存技術協会より提供を受けた神楽殿平面図（1/100）を使用し、一部加筆した。上記以外は諏訪市役所発行の都市計画基本図を使用した。

目 次

例言・凡例

目次

I 市内遺跡発掘調査について	1
II 池のくるみA遺跡（第1次）	3
III 花木久保遺跡（第2次）	5
IV 諏訪神社上社遺跡（第12次）	7
写真図版	14
報告書抄録・奥付	



I 市内遺跡発掘調査について

1 今年度の発掘調査

諏訪市内には現在 240 箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの包蔵地内における開発行為は例年発生しているが、以前に多かった規模の大きな開発事例は年々少なくなり、近年では個人住宅建設などの小規模なものが主体となっている。諏訪市教育委員会ではこれらの開発行為に迅速に対応するため、国庫補助事業として「市内遺跡発掘調査等事業」を実施し、埋蔵文化財の保護を図っているところである。

本年度の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為に伴う文化財保護法による発掘届および通知の提出は 20 件あった。近年は金子城跡などでの宅地造成の有無によって件数が変動する傾向がある。また、現在諏訪大社上社本宮で行われている保存修理工事に関連する届出が 8 件あり、特定案件以外の件数は減少傾向にある。これらのうちの 2 件と豚熱発生時の埋却に関わる遺物・遺構の有無確認の 1 件について試掘・確認調査を実施した。本書でその内容について報告したい（第 1 図）。

・補助事業決定の経過（抄）

令和 5 年 1 月 20 日付け令 4 生学文第 91 号

令和 5 年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金交付申請書

令和 5 年 4 月 1 日付け 4 文庁第 5404 号（長野県教育委員会指令 5 教文第 147 号）

令和 5 年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金交付決定通知書

2 調査組織

調査組織名 諏訪市教育委員会

調査主体者 三輪 晋一（教育長）

事務局 細野 浩一（教育次長）

宮阪 透（生涯学習課長）：令和 5 年 9 月 30 日まで

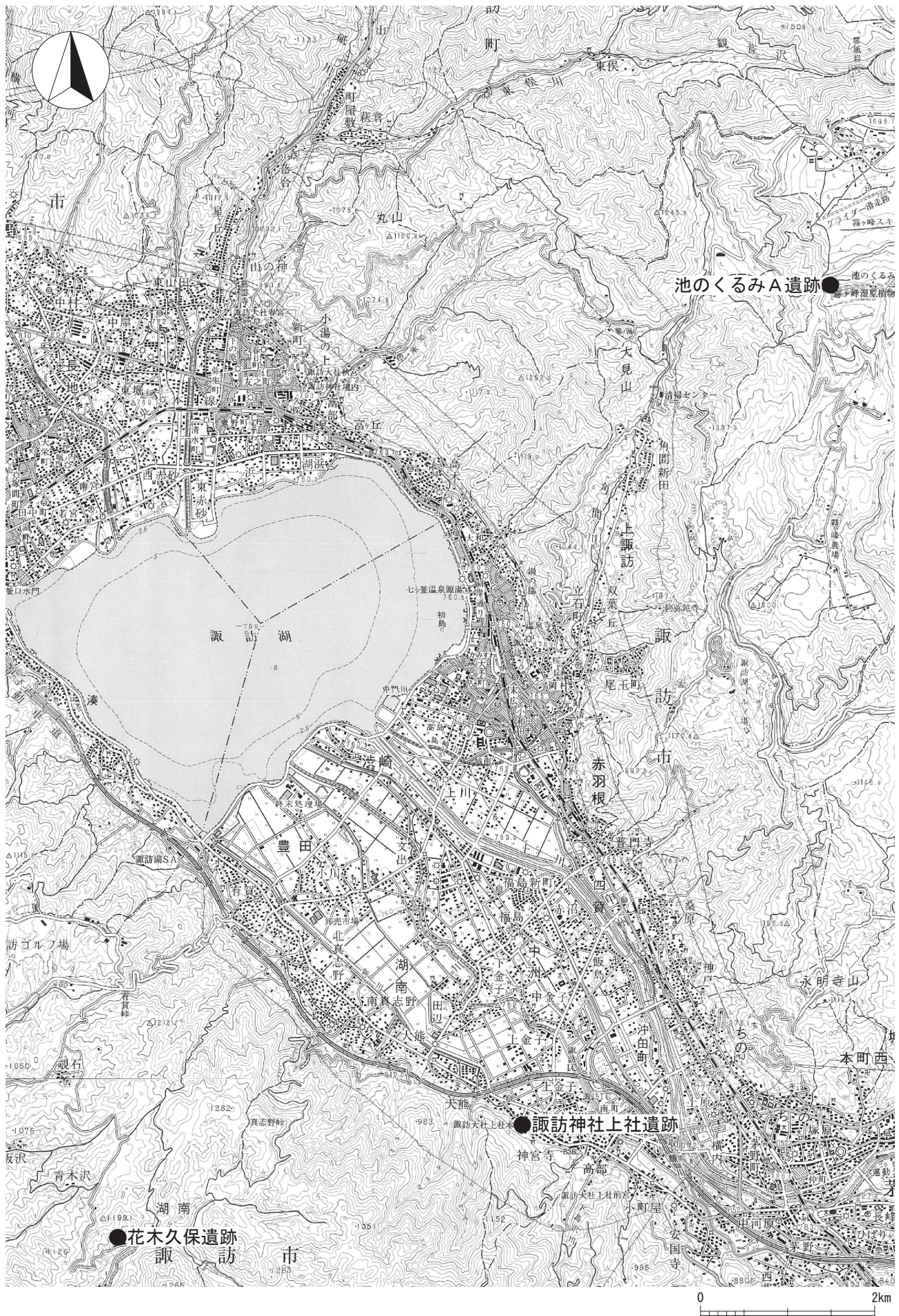
五味 裕史（生涯学習課（文化芸術担当）課長）：令和 5 年 10 月 1 日から

中島 透（生涯学習課文化財係 係長）

日野 正祥（生涯学習課文化財係 主査 調査担当者）

阪口 賢（生涯学習課文化財係 主事）

調査参加者 古畑 しずゑ、三上 徹也、三好 祐司



第1図 令和5年度調査遺跡位置図 (S=1/60,000)

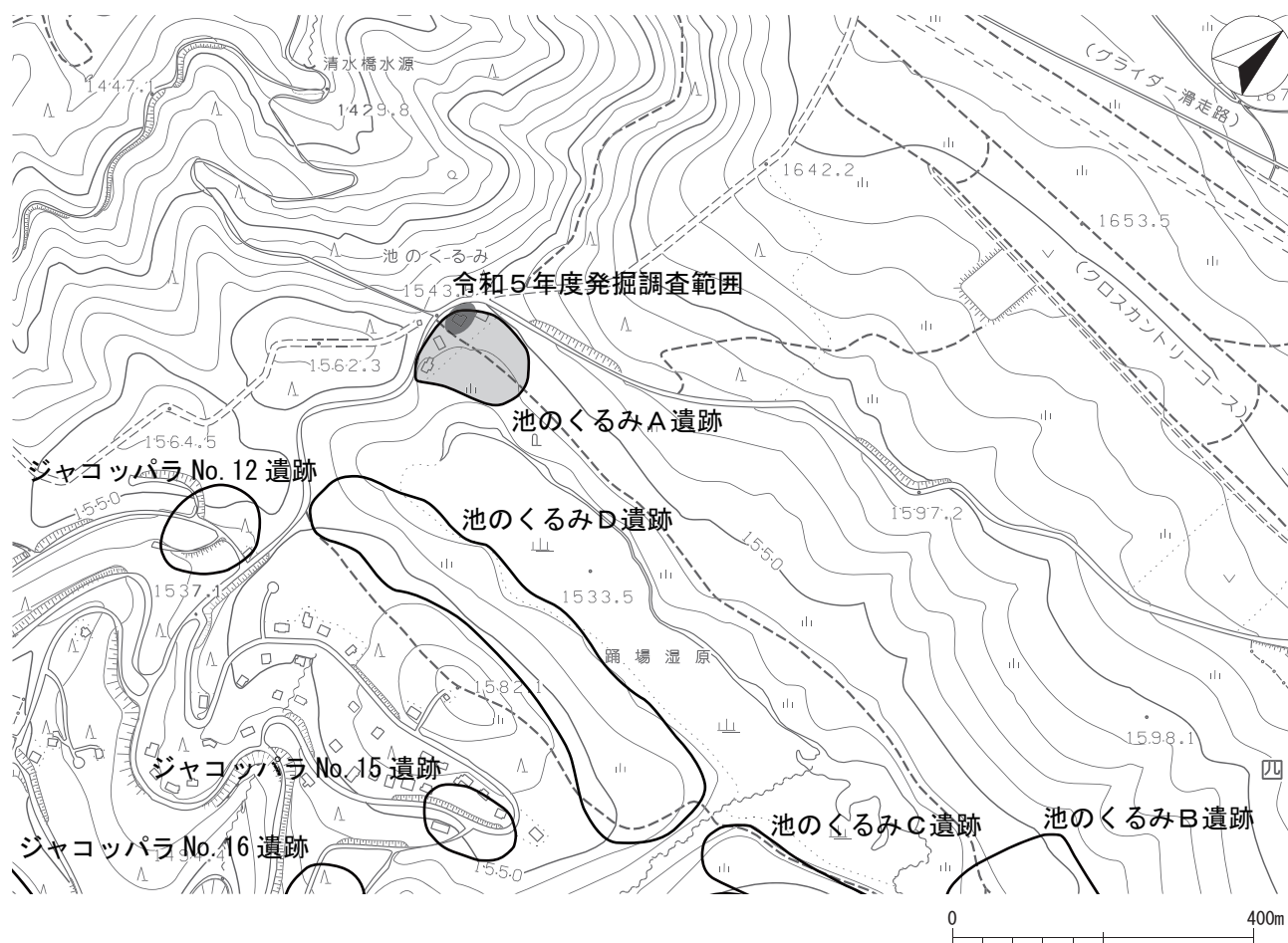
Ⅱ 池のくるみA遺跡（第1次）

- | | | | |
|---------|---------------|---------|------------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市四賀7718番地74 | 4. 調査目的 | 個人住宅浄化槽設置に係る試掘調査 |
| 2. 調査期間 | 令和5年8月2日～3日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 3.75㎡ | 6. 出土遺物 | なし |

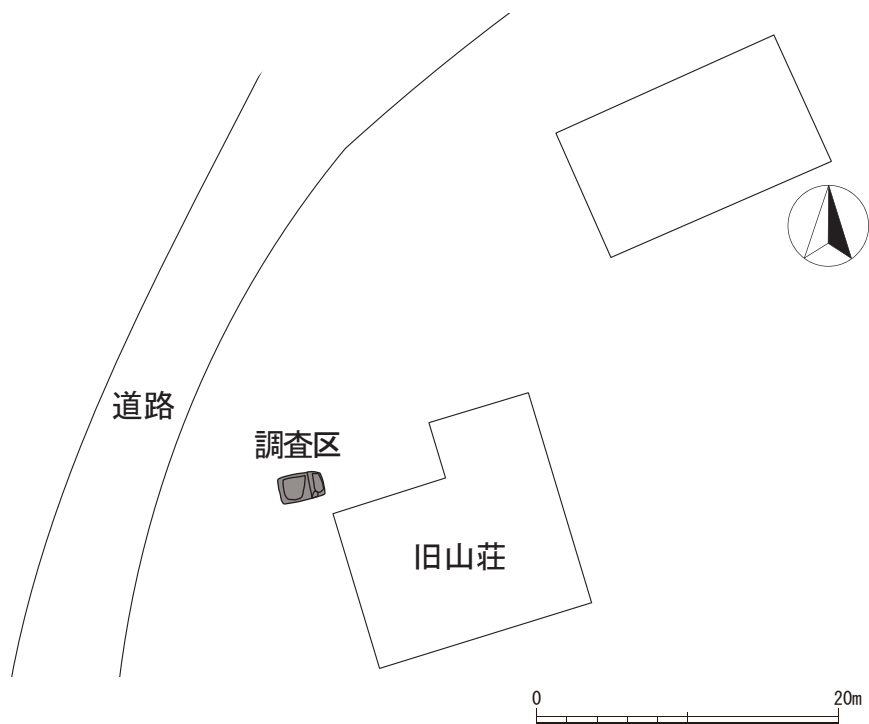
7. 遺跡概要及び調査概要

池のくるみA遺跡は霧ヶ峰高原の南方、国天然記念物である「霧ヶ峰湿原植物群落」を構成する踊場湿原外周に立地する。踊場湿原を囲む小盆地状地形は通称「池のくるみ」と呼ばれることから池のくるみ遺跡と名付けられ、地点ごとにA遺跡～D遺跡となっている（第2図）。各遺跡からは旧石器から平安時代にかけての遺物が出土及び採集されており、特にC遺跡では旧石器時代のナイフ形石器などが多数出土した。また、本遺跡の周囲にも旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く見つかり、現在別荘地となっている南側の斜面地にかけては、ジャコッパラ遺跡群が存在し黒曜石製の石器や石核等の他、縄文時代の落とし穴の遺構などがみつかり、

本調査は既存建造物（旧山荘）の住宅への改修に際して実施される合弁処理浄化槽・地下浸透トレンチの設置に伴う試掘調査である。事前協議の中で浄化槽の設置予定位置を確認し、その範囲に重なるように1.5m×2.5mの調査区を設定して調査を実施した（第3図）。当初手掘りにて掘削を行ったが、石が多く、硬くしまっていることから掘削が難航していたところ、事業者による協力を得た。

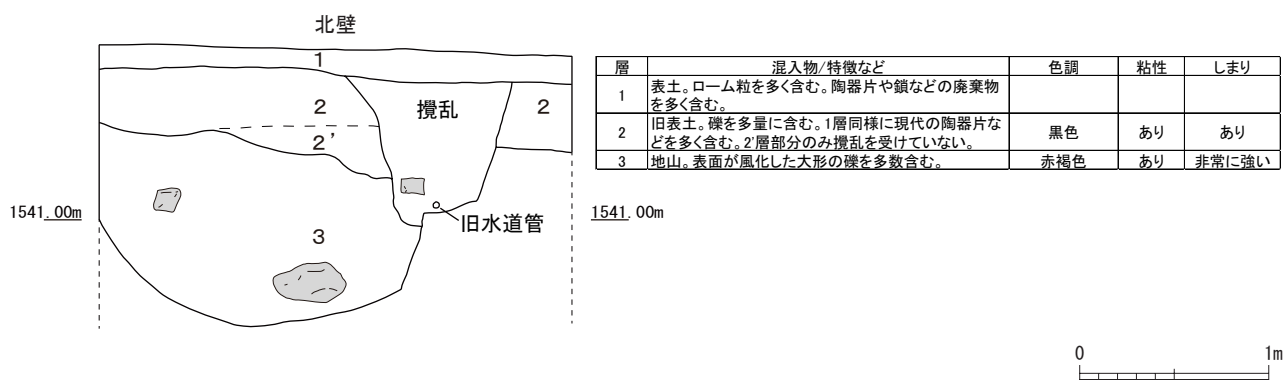


第2図 池のくるみA遺跡位置図（S=1/10,000）



第3図 調査区設定図 (S=1/500)

調査の結果、1層から3層まで確認できた(第4図)。1層は現表土であり、10～15cm程度堆積している。2層は当該地が山荘であったころの地表面かと思われる、上面付近からは当時敷かれていたと思われる鉄平石が一定量出土している。また、割れた皿や金属製のヘラなども散見された。3層は地表面から40～70cm掘り下げたあたりから検出された。礫まじりのローム層であり、150cm程度掘り下げても層相は変わらず、同層を地山と判断して調査を終了した。本調査による遺物・遺構の検出は無い。



第4図 土層断面図 (S=1/40)

8. 総括

同地は過去に山荘が営まれており、土中から出土したいくつかの廃棄物から当時の様相が想像された。また、旧水道管敷設に際して掘削された攪乱層下部では、水道管の下に鉄平石を並べて設置しており、地表にあった廃材の活用かもしれないが、施工方法の地域性が窺える。池のくるみ遺跡は表採が多く遺跡の実態が明らかとなっていないため、今後の調査の機会に期待したい。

<引用・参考文献>

諏訪市教育委員会 1983『諏訪市の遺跡』

諏訪市教育委員会 1995『諏訪市史』上巻

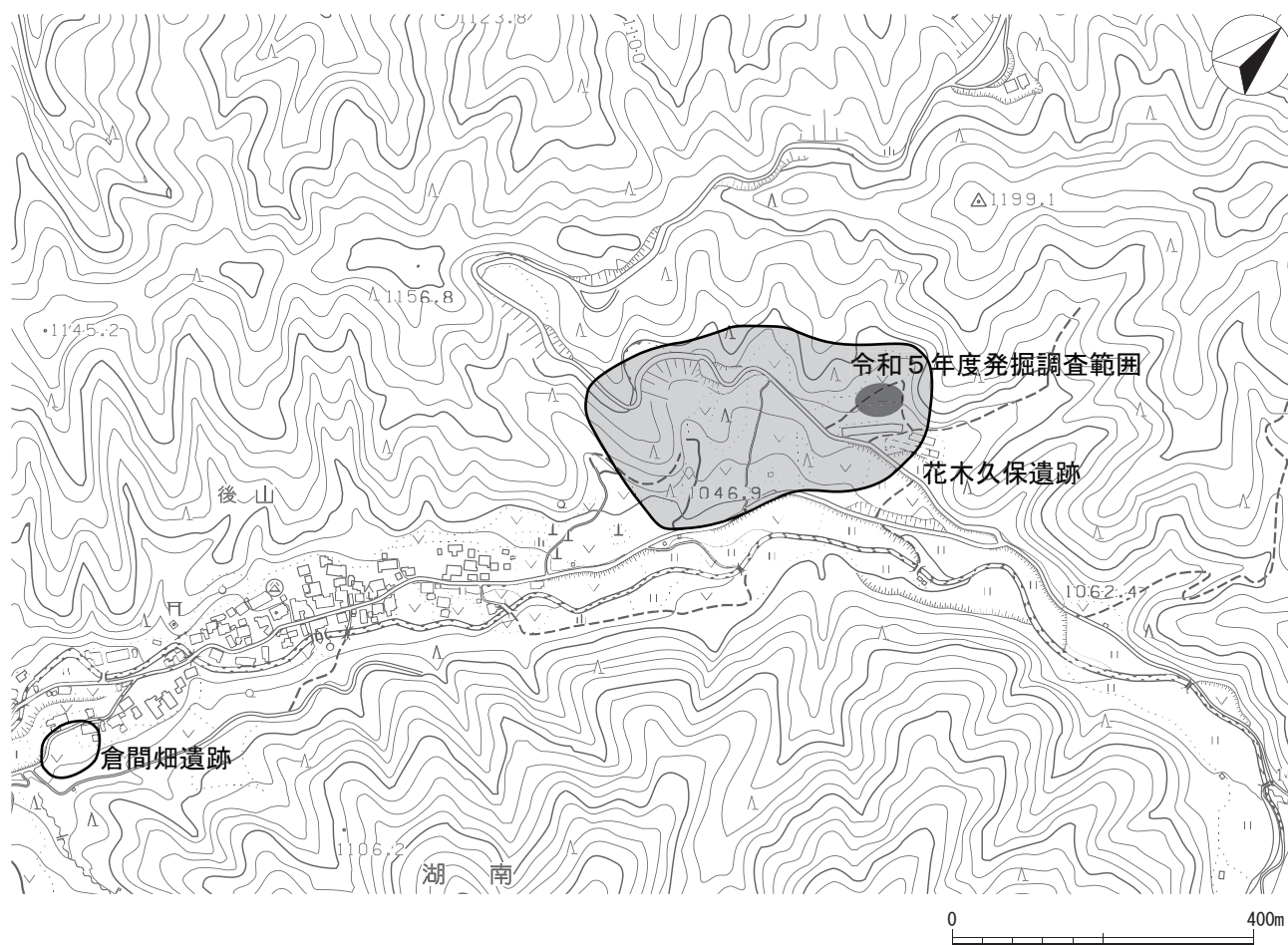
Ⅲ 花木久保遺跡（第2次）

- | | | | | |
|---------|-------------------|----|---------|------------------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市湖南 8 6 6 1 - 1 | ほか | 4. 調査目的 | 豚熱発生時の埋却用地の設定に伴う有無確認調査 |
| 2. 調査期間 | 令和5年10月11日 | | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 8㎡ | | 6. 出土遺物 | なし |

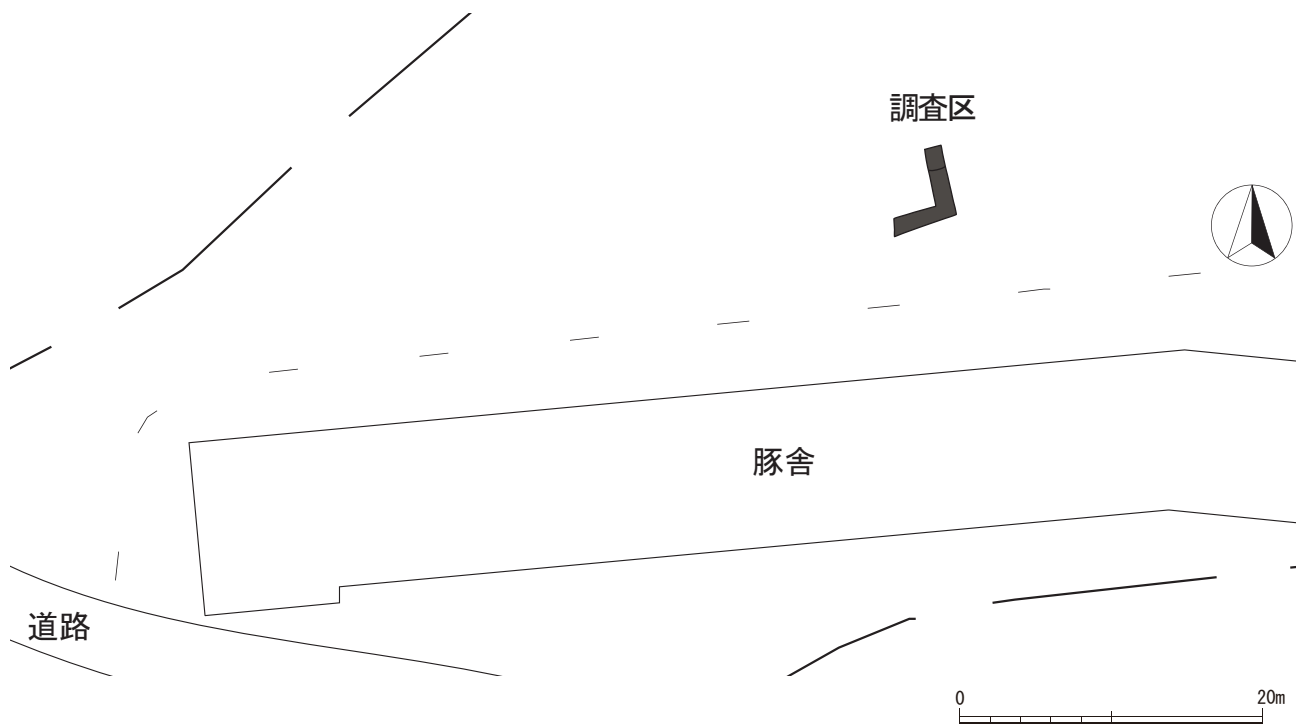
7. 遺跡概要及び調査概要

花木久保遺跡は諏訪湖西側の山中、有賀峠から湖南後山集落に向かう南向き斜面地から谷間地にかけて位置する遺跡である。『諏訪史』第一巻（鳥居龍蔵 1924）において石鏃の出土する遺跡として報告がされているが詳細は不明である。平成 25 年度に長野県道諏訪箕輪線の改良工事に際して同遺跡内の畑地が予定地となったため、事業者と協議を実施し、試掘調査を実施した。しかし、同調査では遺物・遺構等は見られなかった。周囲には倉間畑遺跡など点在するが、いずれも採集のみである（第5図）。

本調査は豚熱発生時の埋却に関わる用地として、遺跡の該当の有無について市農林課より照会があったことに端を発する。養豚場の北側の敷地内に設定された埋却用地が包蔵地内に該当したため市農林課と協議を実施。試掘調査にて遺構・遺物の有無を確認することとなった。調査区は埋却用地内の中央に東西・南北軸がそれぞれ確認できるようにL字で設定。南北に1m×5m、東西に1m×4mで設定して調査を実施した（第6図）。重機にて掘削したのち、精査した。

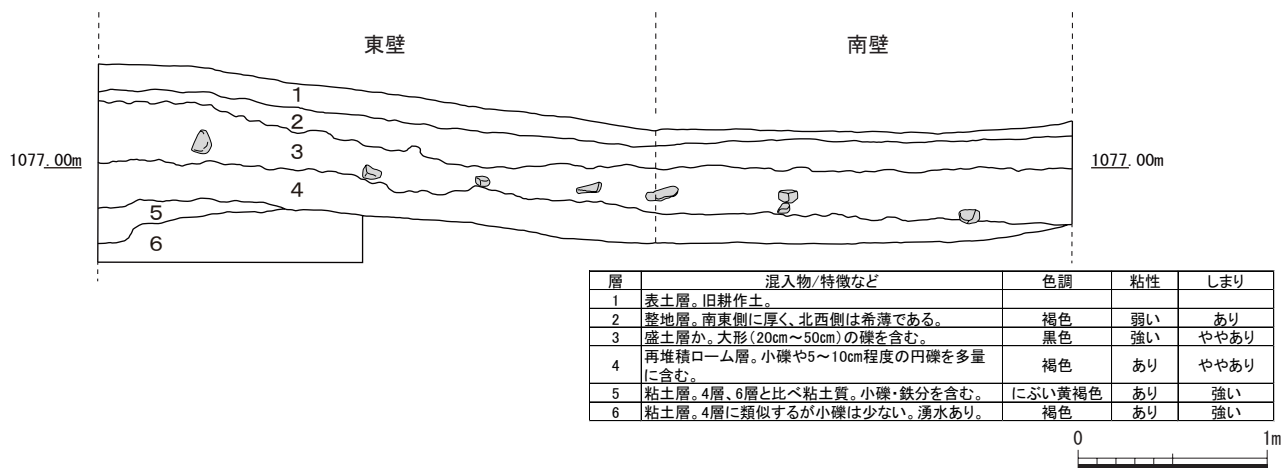


第5図 花木久保遺跡位置図 (S=1/10,000)



第6図 調査区設定図 (S=1/500)

調査の結果、1層から6層まで確認できた(第7図)。表土層の下には、2層から3層にかけて盛土したような痕跡があり、緩やかに南北軸に傾斜する斜面地を整地していると考えられる。4層は再堆積と思われるローム層であり、円礫などを多量に含んでいる。5層・6層は粘土質であり、5層は小礫を含むが6層は小礫なども少なく湧水があり、過去には水流が穏やかな水のたまりやすい土地であった可能性がある。湧水もあり、同地に遺物・遺構のある可能性は低いと判断し調査を終えた。



第7図 土層断面図 (S=1/40)

8. 総括

花木久保遺跡の調査は今回が2度目であったが、第1次同様に遺構・遺物は見られなかった。いずれの調査も比較的傾斜地側である地点での調査であったため、やはり生活の痕跡が見られる可能性があるとするれば、より傾斜地下端側の谷状地内であると考ええる。今後の調査に期待したい。

<引用・参考文献>

諏訪市教育委員会 2014「花木久保遺跡(第1次)」『市内遺跡発掘調査報告書(平成25年度)』

鳥居龍蔵 1924『諏訪史』第一巻

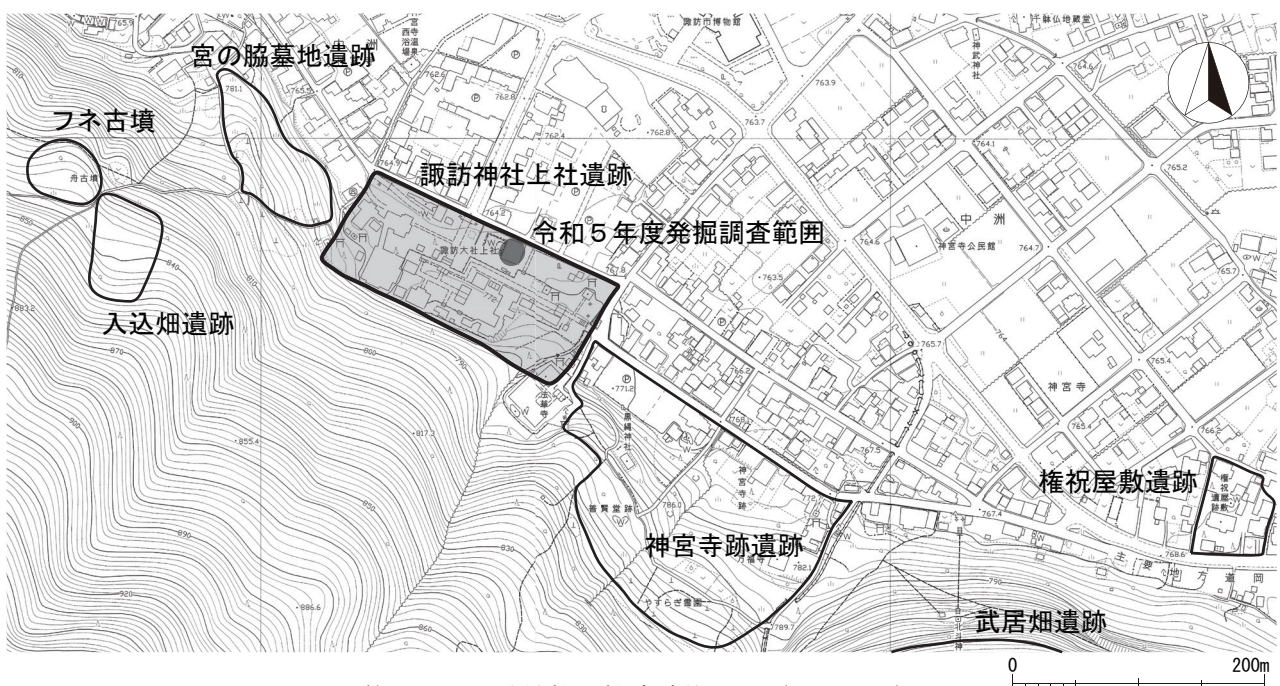
Ⅳ 諏訪神社上社遺跡（第12次）

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|-----------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市中洲宮山1 ほか | 4. 調査目的 | 神楽殿基礎工事に係る試掘調査 |
| 2. 調査期間 | 令和5年8月22日
～令和6年2月20日 | 5. 検出遺構 | 礎石、ピット |
| 3. 調査面積 | 7. 25㎡ | 6. 出土遺物 | かわらけ、陶磁器片、銅銭、瓦片 |

7. 遺跡概要及び調査概要

諏訪神社上社遺跡は全国の諏訪神社の総本社、諏訪大社の上社本宮境内地にあたる。神社が現在の地に鎮座した正確な年代は分かっていないが、奈良時代には存在したといわれる。守屋山麓の末端に鎮座し、かつて諏訪湖がすぐ北側まで広がっていたことから、北端には波除（なみよけ）という鳥居が建つ。背後の神体山は長野県天然記念物にも指定されている樹叢である。境内は山麓端の傾斜地を造成して構成され、幣殿・拝殿（以下、幣拝殿と略す）・四脚門などのある上壇、布橋・勅使殿などの中壇、神楽殿・社務所などのある下壇の3つに分けられる（諏訪大社 2012）。これまでに11次の調査が実施され、境内全域から中世のかわらけや、中・近世の陶磁器等が出土しているが、遺構はあまり検出されておらず、江戸期の絵図などで残される以前の様相については明らかとなっていない。

諏訪大社上社本宮では、令和元年度より令和9年度までの計画で「重要文化財諏訪大社上社本宮布橋ほか9棟保存修理事業」として、布橋・勅願殿・文庫・勅使殿・五間廊・摂末社遥拝所・神楽殿・天流水舎・入口御門・額堂の修理事業を行っている。令和元年度から4年度までは第1期工事として入口御門及び布橋の修理事業を実施しており、その中で令和2年度および3年度に布橋に隣接していたと考えられた番所の復元のために試掘・確認調査を実施した。番所は昭和34年（1959）までは布橋に接続する形で存在したとされており、過去の絵葉書や写真などから礎石の位置を想定しての調査であった。調査の結果、番所の礎石と思われる石を検出し、現在は同地に番所が復元されている。



第8図 諏訪神社上社遺跡位置図（S=1/6000）

令和4年度からは第2期工事として、額堂・摂末社遥拝所・文庫の保存修理事業が開始されている。その中で、額堂については保存修理工事の一環として耐震対策工事が必要となり、補強装置の基礎として額堂の下を掘削することとなり発掘調査を実施した。現在建っている額堂は明治29年（1896）に建築された建物であるが、寛政4年（1792）の絵図を見ると同地には西側から「十六善神 九坪」、「同下陣 十二坪」「法納堂」との記載があり、これらの建物などに関わる遺構や遺物、さらにはそれ以前の建築物などに関わる遺構や遺物が検出される可能性がある想定しての調査であった。

調査の結果、13世紀から14世紀ごろと考えられる多数のかわらけをはじめ、宋銭、寛永通宝、江戸時代の瀬戸美濃窯産の陶器片などが出土している。また、かわらけや宋銭の直下からは上面に平坦面を持つ礫が出土しており、他の礫と石材が異なる点からも、古い建物の礎石か、礎石でないとしても人為的に持ち込まれた可能性があるとしている。

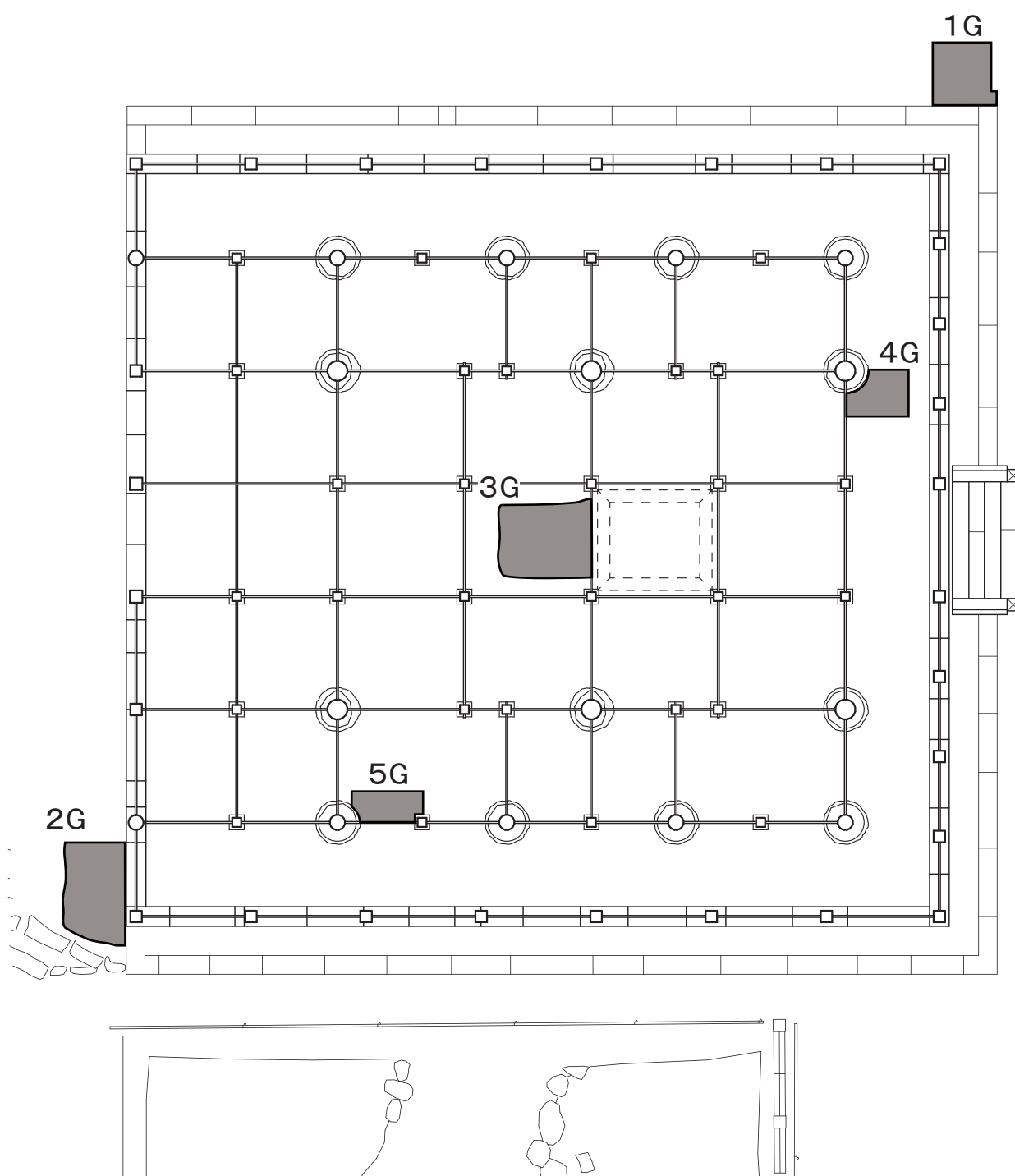
本年度調査は、令和6年度から第3期工事として実施予定の文政10年（1827）に建築された神楽殿の本格的な保存修理工事に先立つ調査である（第8図）。神楽殿は建物北側の道路側に向かって地盤沈下をしており、最大で40cm近く沈下していることが明らかとなっている。そのため、その沈下を防止し、また耐震補強を行うための基礎工事を行う必要があり、その設計に先立ち現在の基礎状況を調査するために保存修理工事の設計監理を請け負っている文化財建造物保存技術協会より土木工事等の届出の提出があった。その後、事業者との協議を行い、事業者が基礎状況の調査を行うために掘削を検討している地点と同じ箇所調査区を設定し先行して試掘調査を実施。その結果を受けて、順次、調査区を設定しながら工法について協議を行うこととした。

なお、平成6年に神楽殿の地盤沈下を補修するため、建物の基礎にコンクリートを入れる工事を実施していることはわかっていたものの、具体的にどのような工事を行っていたのかが不明であり、その工事の状況もあわせて確認した。

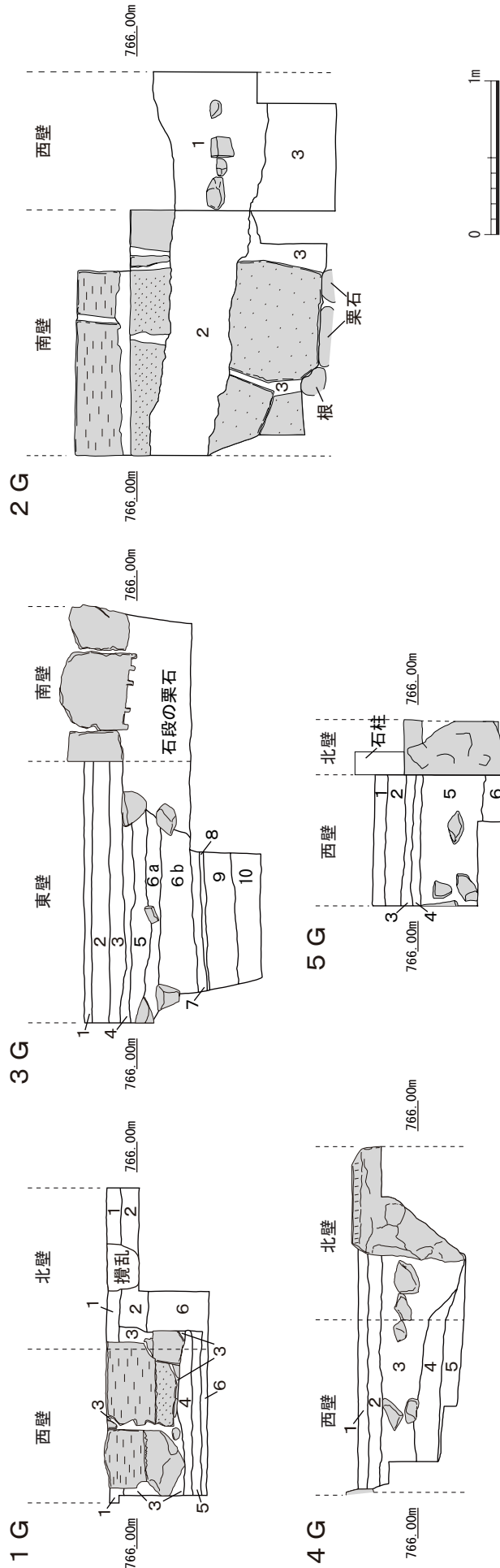
上記に基づき順次調査区を設定。最終的に1G～5Gの調査区を設定した（第9図）。前述の平成6年の工事の影響で地表面付近にコンクリートが打たれている箇所が多く、部分的にコンクリートを掘削して取り除き、その範囲内での調査としたため、3Gから5Gは任意幅での調査区設定である。以下に調査区の概要と土層堆積状況等を記載する（第10図）。

1Gは神楽殿南東隅に1m×1mで調査区を設定して調査を行った。同箇所は比較的地盤の沈下が少ないと考えられる箇所であり、調査結果からもその様相が見られた。表土層は白色の砂利であり、硬くしまっている。2層は砂利敷設前の地表面と考えられる。3層から5層にかけては平成6年の基礎工事の際に行われた一連の工事に伴うものであり、碎石を入れコンクリートを打設し、その上に布石を据え直している。6層は平成6年の工事以前からの堆積と考えられるが、大形の礫が多数あり、それ以上の掘削は困難であったため調査を終えた。

2Gは神楽殿北西隅に1m×1.5mで調査区を設定して調査を行った。こちらは建物西側の清祓池に隣接する神楽殿外周で最も沈下が大きいと考える箇所であり、布石の下部をはじめとして、地中の状況を確認するために掘削を開始した。1層は強く乾燥しており、表層と分離できない状況であった。2層は平成6年の基礎工事の際に入れられたコンクリートの層であり、今回の調査を通して一番厚くコンクリートが見られた。ただし、側面のみからの観察であるため、元々あった石積みの表面をコンクリートで覆っている可能性もある。3層は1層同様よく乾燥した土であり、根などの混入が多くみられた。また、かわらけや陶磁器片なども少量ではあるが出土した。3層を掘削したところ、幅75cm程度、高さ



第9図 神楽殿調査区設定図 (S=1/100)



層	混入物/特徴など	色調	粘性	しまり
1	素土層。0.5～1cm程度の小礫を主とする。白色の砂利を密に含む。			
2	旧素土層。1層と類似するが、径2～3cm程度の礫を多数含む。大礫を含む。	灰色	なし	非常に強い
3	砂礫層。破石の据え直しの際の掘り込み。平成の改修工事の際の地表面。	にぶい褐色	ややあり	強い
4	平成の基礎工事の際に、破石の底面に打設されたコンクリート。			
5	砕石層。平成の基礎工事の際の地表面。	灰黄褐色	なし	強い
6	15～20cm程度の礫を多数含む。大形礫を含む。	にぶい黄褐色	あり	強い

層	混入物/特徴など	色調	粘性	しまり
1	砂利層。現表土。コンクリートの上面に敷設。			
2	平成の基礎工事の際に打設されたコンクリート。			
3	砕石層。平成の基礎工事の際の地表面。			
4	現神楽殿建築時の地表面か、転圧されており、硬くまろ。30cm程度の大型礫を含む。	褐色	なし	強い
5	4層と同様、転圧されており硬くまろ。4層に比べて土壌化が少ない。	明褐色	なし	強い
6a	大形礫層。10～20cm程度の礫を主体とする。神楽殿建築時の造成土層か。a層はb層に比べ、植物根が多く土壌化が進んでいる。	暗褐色	ほぼなし	強い
6b		褐色	ほぼなし	強い
7	旧地表面か、水の影響を受けている。小礫を含む。	暗褐色	なし	非常に強い
8	灰化物を含み、灰色味を帯びる。	褐色	ややあり	強い
9	一般的な黒色土層。上層に比べ水分を含む。根による攪乱が多い。	黒褐色	ややあり	強い
10	地山か。根により部分的に黒色味を帯びる。	褐色	ややあり	強い

層	混入物/特徴など	色調	粘性	しまり
1	砂質。礫・植物根が多数。コンクリート片を含む。乾燥が強く素土層と分離していない。			
2	平成の基礎工事の際に打設されたコンクリート。			
3	さらさらした乾燥した土。植物の根が多く入り込む。	暗褐色	ほぼなし	強い

層	混入物/特徴など	色調	粘性	しまり
1	3Gの2層相当。			
2	3Gの3層相当。			
3	3Gの4～6層相当。現神楽殿建築時の地表面から造成土か。破石周りには栗石が多く見られる。	褐色	なし	強い
4	3Gの7～8層相当。	暗褐色	なし	非常に強い
5	3Gの9層相当。	黒褐色	ややあり	強い

層	混入物/特徴など	色調	粘性	しまり
1	3Gの2層相当。			
2	3Gの3層相当。			
3	砂質。破石上面とほぼ同じ高さに堆積。根が多い。乾燥している。	にぶい黄褐色	なし	なし
4	漸移層。3層と比べ根はほぼない。	褐色	なし	強い
5	3Gの4～5層相当。現神楽殿の建立以前の地表面か。破石周りには栗石が多く見られる。	褐色	なし	強い
6	3Gの6層相当。	暗褐色	ほぼなし	強い

第10図 土層断面図 (S=1/40)

60cm 程度の表面を加工した大形石が布石下のコンクリート直下より検出された。この大形石による石積みは、表面を丁寧に加工していることから当初は見える状態にあったと考えられ、3層は石積み後に堆積したものとする。なお、神楽殿北東隅においても同様の石積みがされているかの確認のための掘削を文化財建造物保存技術協会が行い、この石積みと類似する大形石が確認されている。以上のことから、神楽殿道路側は、建物建築当初は大形石の石積みが露出していたと考える。

3 Gは1 G、2 Gの中間に位置し、神楽殿の傾斜状況及び神楽殿直下の土層の体積状況を確認するために調査区を設定した。神楽殿の床下にも平成6年の基礎工事の際にコンクリートが張られていたが、中央石積み付近のみコンクリートが続いておらず地表面が砂利に覆われているだけの状態であった。そのため、この範囲に3 Gを設定して調査を開始した。調査の結果、同地の土層は3つのグループに区分できると考えられた。1つめは1層から3層にかけてであり、これらの層は平成6年の基礎工事及びそれ以降に堆積した土層である。2つめは4層から6層にかけてであり、これらの層は神楽殿建築時に由来していると考えられる。3つめは7層以下の土層であり、これは神楽殿建築以前のものと考えられる。

なお、調査に際して、調査区に隣接する石積みがどのような目的でいつの段階に設置されたものなのかが当初より疑問となっていたが、過去に神楽殿で行われていた湯立神事に関わるものの可能性が指摘されており、3 G調査時に確認した石積みの栗石などからも神楽殿建築時に築かれたものとする。

4 Gは1 Gから3 Gの調査後に、礎石の状態を確認する目的で調査区を設定した。神楽殿建築当初からの礎石の多くは、平成6年の工事の際に上面をコンクリートで覆われており、現在露出している箇所を除いて地中に埋まっているかさえ不明な状態であった。そのため、まず礎石の大きさを確認する目的で、現在礎石が露出している地盤沈下が少ない南東側の礎石の周囲を削岩機を用いて掘削し4 Gを設定して調査を開始した。調査の結果、礎石の大きさを確認することができた。検出した礎石の底部及び幅から推定すると、左右、上下ともに約70cm程度の礎石である。土層の堆積状況は、基本的には3 Gと同様の層相を示しており、大きくは3つに分けられる。なお、表土層はコンクリートを掘削する前にある程度撤去してしまったためセクション図には反映していないが、掘削前には砂利がコンクリートの上に広がっていた。

5 Gは4 G同様に礎石の状態を確認するため、より沈下が進んでいると考えられる北西側の礎石を対象に調査区を設定した。4 Gのように礎石の上部は調査前には露出しておらず、沈下が進んで平成6年の基礎工事の際に新しい円柱状の礎石が据えられており、その一部がコンクリートの上面に露出していた。そのため、神楽殿建築当時の礎石は沈下しているか、または、平成6年の工事の際に抜き取られて新たに現在の礎石を据えたと考え、地中の状況を確認するため調査を開始した。結果、円柱状の礎石の下に当初のものと思われる礎石が確認できた。土層の堆積状況は3 Gと基本的には同様と考えられるが、沈下が大きく、神楽殿建築時から平成6年の基礎工事前までの間に沈下した礎石の周りに隙間風などで砂が入り込み堆積し、2層及び3層を形成していたと考えられる。なお、セクション図には反映されていないが、礎石と礎石の間にあったと考えられる束石も確認されたが、平成6年に打たれたコンクリートとの間には大きく隙間が空いている状態であり、平成6年の基礎工事後にもさらに沈下が進んでいることを推察させる。

出土遺構と出土遺物

本調査では、神楽殿建築時の造成に関わると考えられる土層、神楽殿北側の石積み、神楽殿建築当初

から使用されていると考えられる礎石や東石が検出されている。特に2 Gで確認した大形石の石積みについては、神楽殿建築当初の姿を考察するうえで一定の成果であるといえる。ただし、造成に関わると考えられる土層については、3 G隣接の石積み下の礫層など、神楽殿全体にどの程度の広がりを見せるか今回の調査だけでは判明していない。

本調査で出土した遺物は、かわらけ、陶磁器の破片、古銭、瓦片である（第11図）。大半は2 Gの2層からの出土であり、それ以外の調査区から出土したものは3 Gから寛永通宝1点（11-16）、5 Gからかわらけ1点（11-4）、5 Gにて検出された礎石の東隣にある礎石の状況確認のために文化財建造物保存技術協会によって掘削された穴から出土した瓦片1点（11-17）である。

かわらけはいずれも底部の破片であり、残存部位が小さいため具体的な時期は不明であるが中世のものと推測される（11-1～4）。いずれも糸切り痕が見られ、3は糸切りの後にヘラケズリを行っている。なお、令和4年度に行われた中壇にある額堂の試掘調査の際には12世紀～13世紀くらいのかかわらが多数出土したが、本調査で出土したかわらけはより新しい時代のものと考えられる。

陶器はいずれも近世末から近代のものと推測される（11-5～7）。5は掲載以外にも接合しない若干の破片がある。また、6と7は同一個体と考えられるが、口縁部と底部との中間部分が欠損していることから、大きさや器形については判断できない。

磁器は陶器同様、近世末から近代にかけてのものと考えられる（11-8～15）。8から11は口縁部の破片であり、8については湯呑みと考える。11は波状口縁の皿と考えられ、12と同一個体であるが接合はしない。13から15は底部である。13はそば猪口、14は茶碗、15は盃のような器形と考えられる。

銅銭は寛永通宝が1点出土しており、裏面は波模様である。

瓦片は1点出土している。長辺の下面側はヘラ切りしており、その後、折ったような痕跡が見られる。折損部分が多く全体像や使用された場所などの判断は難しいが、新しい折損面を除くと方形ではない形状をしていたと考えられる。神楽殿建築時の造成土中からの出土と考えられることから、その供給源にあった建物に関連するものとする。

8. 総括

本調査は、神楽殿の保存修理工事に伴う耐震補強及び地盤沈下対策の方法について検討するための基礎調査に先立つ試掘調査であり、神楽殿範囲内の土層の堆積状況、遺構・遺物の有無、礎石の状況などの確認を行った。その結果、神楽殿建築時の造成土層や石積み、礎石などの遺構が検出され、また少量ではあるがかわらけ、陶磁器、銅銭、瓦などの遺物が出土した。しかし、いずれも造成土や攪乱からの出土であることから、別の場所から持ち込まれた可能性がある。

同地には、神楽殿建築以前にも別の建物があったという記録もあることから、本調査の試掘区以外の箇所でもその痕跡を見つけられる可能性もある。そのため、令和6年度に実施予定の神楽殿の保存修理工事の際にもより慎重に調査を行い、同地点の変遷を明らかにしたい。

<引用・参考文献>

諏訪大社 2012『信濃國一之宮 諏訪大社上社本宮 建造物調査報告書』

諏訪市教育委員会 2016「諏訪神社上社遺跡（第8次）」『市内遺跡発掘調査報告書（平成27年度）』

諏訪市教育委員会 2021「諏訪神社上社遺跡（第9次）」『市内遺跡発掘調査報告書（令和2年度）』

諏訪市教育委員会 2022「諏訪神社上社遺跡（第10次）」『市内遺跡発掘調査報告書（令和3年度）』

諏訪市教育委員会 2023「諏訪神社上社遺跡（第11次）」『市内遺跡発掘調査報告書（令和4年度）』



第11図 諏訪神社上社遺跡出土遺物 (S=1/3)

写真図版

写真図版 1
(池のくるみA遺跡)



調査地全景（南西から）



調査区設定状況（南から）



完掘状況（南から）



完掘状況（北から）



完掘状況（西から）



完掘状況・スタッフ入り（南から）



完掘状況・スタッフ入り（北から）

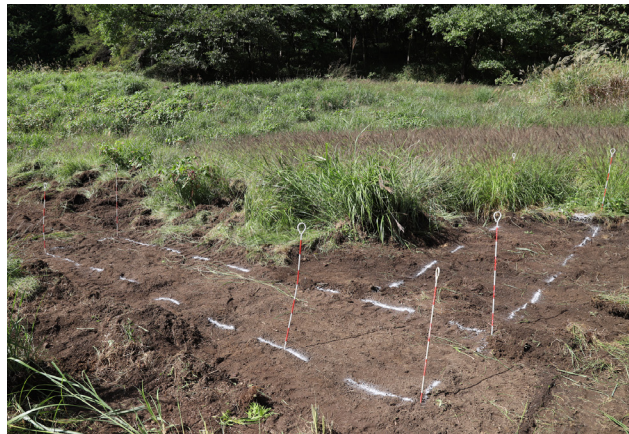


完掘状況・スタッフ入り（西から）

写真図版2
(花木久保遺跡)



調査地全景（南西から）



調査区設定状況（南東から）



完掘状況（南東から）



完掘状況（南から）



完掘状況（南西から）



土層体積状況（南西から）



深掘り湧水状況（南西から）

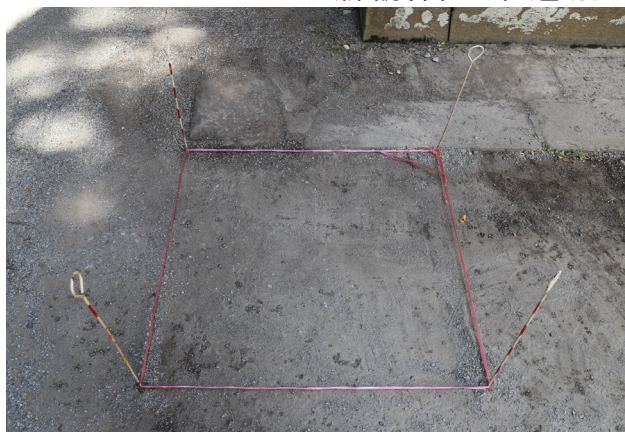


完掘状況・スタッフ入り（南から）

写真図版 3
(諏訪神社上社遺跡)



調査地全景（南から）



1 G 設定状況（東から）



1 G 完掘状況（東から）



1 G 完掘状況（東から）



1 G 完掘状況（北から）



1 G 完掘状況（南から）



1 G 完掘状況（東から）



1 G 完掘状況・スタッフ入り（東から）

写真図版 4
(諏訪神社上社遺跡)



2 G 調査地遠景 (北西から)



2 G 設定状況 (北から)



2 G 完掘状況 (北から)



2 G 完掘状況 (東から)



2 G 完掘状況 (西から)



2 G 完掘状況 (北から)



2 G 石積みとの境界状況 (北東から)



2 G 完掘状況・スタッフ入り (北から)

写真図版 5
(諏訪神社上社遺跡)



3 G 調査地遠景（北から）



3 G 調査区設定状況（北から）



3 G 完掘状況（北から）



3 G 完掘状況（東から）



3 G 完掘状況（北西から）



3 G 石積みと栗石遠景（北西から）



3 G 土層堆積状況（西から）



3 G 栗石検出状況（北西から）

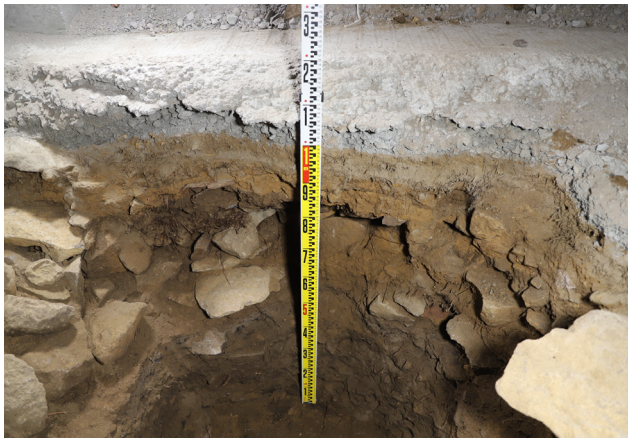
写真図版 6
(諏訪神社上社遺跡)



3 G完掘状況（上から）



3 G完掘状況・スタッフ入り（北から）



3 G完掘状況・スタッフ入り（東から）



3 G完掘状況・スタッフ入り（西から）



4 G礎石周囲コンクリート掘削状況（南西から）



4 G礎石上部検出状況（南から）



4 G完掘状況（東から）



4 G完掘状況・礎石近景（南から）

写真図版 7
(諏訪神社上社遺跡)



5 G 礎石周囲コンクリート掘削状況（北東から）



5 G 礎石上部検出状況（東から）



5 G 付近コンクリート撤去後状況（北東から）



5 G 調査前状況（東から）



5 G 完掘状況（東から）



5 G 礎石下部検出状況（南から）



5 G 東石検出状況（北東から）



5 G 完掘状況・スタッフ入り（東から）

報告書抄録

ふりがな		しないいせきはつつちょうさほうこくしよれいわごねんど						
書名		市内遺跡発掘調査報告書（令和5年度）						
副書名		長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		諏訪市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号		第85集						
編著者名		日野 正祥						
編集機関		諏訪市教育委員会						
所在地		〒392-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 電話0266-52-4141						
発行年月日		令和6（2024）年3月29日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	。 ’ ”	。 ’ ”			
池のくるみーいせき	ずわししが	202061	412	36° 05′ 06″	138° 09′ 26″	2023. 8. 2 ～ 2023. 8. 3	3. 75	個人住宅の浄化槽等に係る試掘調査
池のくるみA遺跡	諏訪市四賀							
はなきくぼいせき	ずわしこなみ	202061	366	35° 59′ 10″	138° 04′ 02″	2023. 10. 11 ～ 2023. 10. 11	8	豚糞発生時の埋却用地における文化財の有無確認調査
花木久保遺跡	諏訪市湖南							
ずわじんじやかみしやいせき	ずわしなかず	202061	352	35° 59′ 54″	138° 07′ 11″	2023. 8. 22 ～ 2024. 2. 20	7. 25	保存修理の基礎調査に先立つ確認調査
諏訪神社上社遺跡	諏訪市中洲							
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
池のくるみA遺跡（1次）	散布地	旧石器・縄文・平安						分布無し
花木久保遺跡（2次）	散布地	縄文						分布無し
諏訪神社上社遺跡（12次）	寺社跡	縄文・平安～近世		礎石、東石、石積み		かわらけ・陶磁器・銅銭・瓦		神楽殿の埋没した礎石・石積み
要約	・池のくるみA遺跡 第1次：遺構・遺物なし。 ・花木久保遺跡 第2次：遺構・遺物なし。 ・諏訪神社上社遺跡 第12次：中世のかわらけ、陶磁器が少量出土。いずれも破片資料。その他、寛永通宝、瓦が1点ずつ出土した。また、神楽殿建築時の造成土、石積み、礎石・東石などが見つかった。							

市内遺跡発掘調査報告書（令和5年度）

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

発行日 令和6（2024）年3月29日

編集・発行 諏訪市教育委員会

長野県諏訪市高島1-22-30

印刷 有限会社増澤印刷所